B9-1

療護看護プログラムの少人数制伝達講習会実施による看護スタッフの意識の変化

○高野 朋実[1]、小山 令江[1]、工藤 陽子[1]、阿部 淑子[1]、遠藤 裕司[1]
栗村 由紀子[1]、川熊 のぶい[1]、長嶺 義秀[2]、藤原 悟[3]

[1]一般財団法人　広南会　広南病院　東北療護センター　看護部
[2]広南病院　東北療護センター　診療部
[3]広南病院　脳神経外科

【目的】療護看護プログラム（RNP）は生活行動の再獲得と自立を目的としており遷延性意識障害患者への有効性は本学会でも示されている。当センターでもケアにおいて患者、介護者双方の負担軽減に繋がるため導入している。なかでも生活支援技術(以下、「技術」とする)の実践には実践者の理解と技術の習得が必要と考え、実地プログラム主体の体験型伝達講習会を行った。その結果スタッフが「技術」の楽しさや気持ちよさを知り、「技術」に対して自信を得ることが出来たので報告する。

【方法】対象者：スタッフ 45 名(正看護師 30 名、准看護師 7 名、介護士 8 名)方法：手技を図解した資料の作成。講習は一回につき講師 2 名、30 分間、受講者 4～6 名の少人数制でお互いに体験しながら進める。データの収集・分析方法：「技術」に対する意識の変化などに関するアンケート調査を実施し、比較分析を行う。

【倫理的配慮】アンケートは説明と同意を得て実施した。

【結果】アンケートの回収率は 100%で、回答の内訳は「好印象」が 69%で「意味が無いや面倒等の印象を持った」が 28%であり、講習内容を「日々実践している」が 96%で「実施していない」が 4%という結果となった。講習会は勤務時間内で行うことができ、少人数制の為タイムリーな形で疑問が解消できたとの声が聞かれた。

【考察】「技術」に対する興味・関心を持ってもらう為に企画した伝達講習会だったが、講師と受講者の物理的、心理的距離が近くなった事で、患者体験によって感じた印象を直接質問したり、個別に指導を受けられるという環境で、曖昧だった部分が解決され、自信を持って技術が提供できるという意識の変化に繋がったのではないかと考える。